

第6章 生徒指導の実態

本章では、学級規模の違いが現実の生徒指導にどのような特質なり差違をもたらしているか、その実態に関する小学校及び中学校教員の調査結果を検討することにする。

設問は、児童・生徒の実態把握の特質（小学校の場合は問5、中学校の場合は問13）、学級の運営や生活・生徒指導の特質（小学校は問12、中学校は問14）の2つであるが、その内容は小・中学校教員とも同一である。以下、それぞれの設問ごとに、小学校及び中学校における生徒指導の実態について検討することにする。

6-1 児童・生徒の実態把握

「児童・生徒の実態把握」について5項目を示し、それぞれに関する度合いを「大変苦労した、やや苦労した、あまり苦労しなかった、全く苦労しなかった」の中から一つを選んでもらった。

6-1-1 小学校教員の場合

<全般的特質>

小学校教員の回答結果を整理して示せば、次の<表6-1-1>である。

表6-1-1 学級児童の実態把握

選 択 肢 授 業 の 特 質	大変苦労 した	やや苦労 した	あまり苦労 しなかった	全く苦労し なかった	合 計 度数 / %
(1) 全員の名前を覚えること	59 1.1	682 12.7	2281 42.3	2366 43.9	5388 100
(2) 一人一人の児童の交友関係 の把握	396 7.4	2133 39.8	2361 44.0	471 8.8	5361 100
(3) 一人一人の児童の家庭環境 の把握	537 10.1	2187 40.9	2200 41.2	420 7.9	5344 100
(4) 一人一人の児童の理解度や つまずきの把握	1101 20.5	2411 45.0	1578 29.4	270 5.0	5360 100
(5) 一人一人の児童のものの考 え方、見方の把握	1356 25.2	2475 46.1	1336 24.9	205 3.8	5372 100

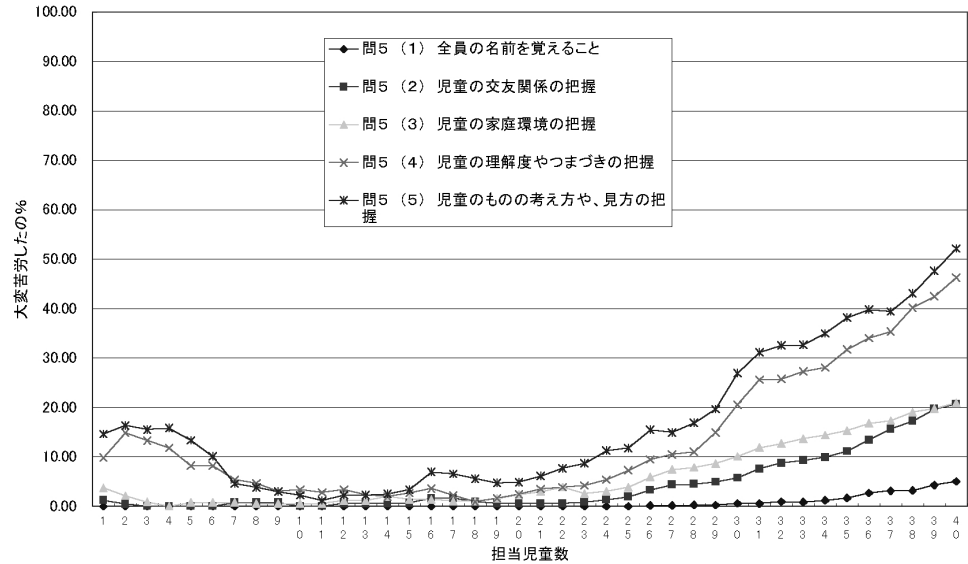
表より、「大変苦労した」と「やや苦労した」を合計して6割を超えるのは(4)と(5)である。(3)も51%とやや高くなっている。

反面、(1)と(2)は「あまり苦労しなかった」と「全く苦労しなかった」の合計が、それぞれ86%、53%と高率になっている。

<移動平均法による分析>

次に、「大変苦労した」とする回答結果（％）を基に移動平均法（第2章の脚注を参照）による分析を行った。その結果を示せば、＜図6-1-1＞の通りである。

図6-1-1 学級の児童の実態把握（移動平均法）



図より、（１）に関しては児童数１人から４０人までの学級を通じて0%～5%内の類似した状況がみられる。

残る４項目に関しては、いずれも、概ね児童数２６人から２８人を境に「大変苦労した」とする割合が上昇に転じる傾向がみられる。とりわけ、（４）と（５）に関してはこの上昇傾向がより顕著である。

6-1-2 中学校教員の場合

<全般的特質>

中学校教員の回答結果を整理して示せば、次の＜表6-1-2＞である。

表6-1-2 学級生徒の実態把握

授業の特質	選 択 肢	大変苦労した	やや苦労した	あまり苦労しなかった	全く苦労しなかった	合 計 度数 / %
(1) 全員の名前を覚えること		99	687	2081	2016	4883
		2.0	14.1	42.6	41.3	100
(2) 一人一人の生徒の交友関係の把握		439	1996	2157	280	4872
		9.0	41.0	44.3	5.8	100
(3) 一人一人の生徒の家庭環境の把握		655	2166	1846	190	4857
		13.5	44.6	38.0	3.9	100
(4) 一人一人の生徒の理解度やつまづきの把握		939	2503	1343	93	4878
		19.3	51.3	27.5	1.9	100
(5) 一人一人の生徒のものの考え方、見方の把握		1481	2315	985	91	4872
		30.4	47.5	20.2	1.9	100

表より、「大変苦労した」と「やや苦労した」を合計して6割を超えるのは(4)と(5)である。(3)も58%とやや高くなっている。

反面、(1)は「あまり苦労しなかった」と「全く苦労しなかった」の合計が84%と高率にある。

(2)は「大変苦労した」と「やや苦労した」の合計と「あまり苦労しなかった」と「全く苦労しなかった」の合計がほぼ50%と相半ばしている。

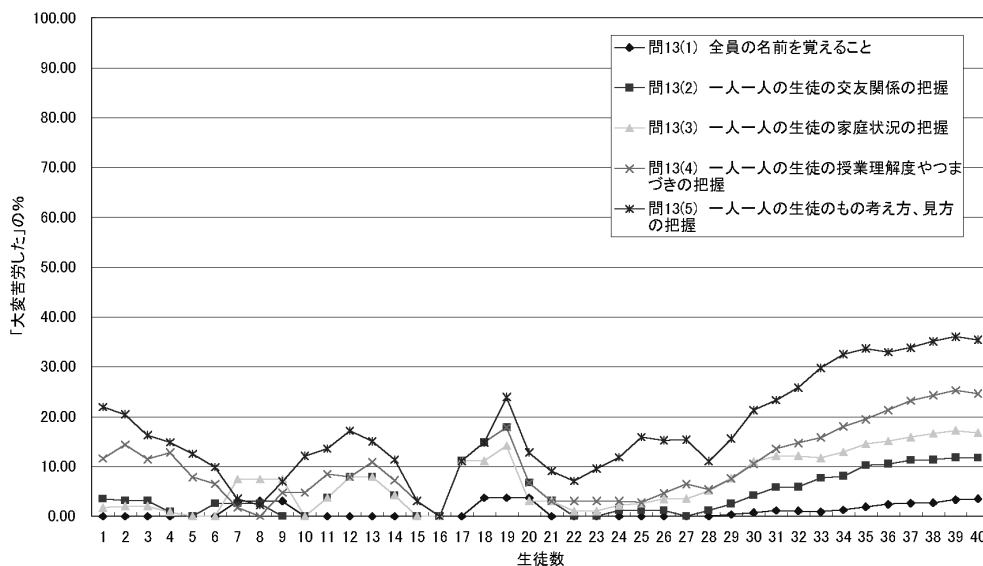
<移動平均法による分析>

次に、「大変苦労した」の回答結果に基づく移動平均法による分析結果を示せば、<図6-1-2>の通りである。

図より、(1)(2)(3)に関しては、生徒数1人から40人までの学級において、それぞれに概ね類似した実態把握がみられる(それぞれ0%~8%内、0%~18%内、0%~17%内の苦労)。また、(4)に関しては、生徒数1人から40人までの学級において0%~25%内で4つのほぼ同じ高さの山を築いており、特定の生徒数を境に苦労が上昇するーあるいは、下降するといった一定の傾向はみられない。

他方、(5)に関しては、生徒数1人から30人までの学級においては上昇・下降を繰り返しながらも概ね類似した実態把握にあるが、生徒数31人を境に苦労の度合いがやや上昇傾向に転じている。

図6-1-2 担当学級の生徒の実態把握(移動平均法)



6-2 学級の運営や児童・生徒の生活・生徒指導

次に、「学級の運営や児童・生徒の生活・生徒指導」に関する8つの項目を示し、それぞれに関する度合いを「よくある、時々ある、あまりない、全くない」の中から一つを選んでもらった。

6-2-1 小学校教員の場合

< 全般的特質 >

小学校教員の回答結果を整理して示せば、次の<表6-2-1>である。

表6-2-1 学級運営や児童の生活指導の実態

授 業 の 特 質	よくある	時々ある	あまりない	全くない	合 計 度数 / %
(1) 話を聞いたり相談にのってやれないと感じたこと	665 12.4	2777 51.9	1676 31.3	235 4.4	5353 100
(2) クラスとしてのまとまりが築けないと感じたこと	407 7.6	1965 36.7	2472 46.2	504 9.4	5348 100
(3) 児童が何を考えているか分からないと感じたこと	333 6.2	2298 42.9	2507 46.8	218 4.1	5356 100
(4) 児童相互の人間関係のことで思い悩んだこと	600 11.2	2536 47.4	1953 36.5	258 4.8	5347 100
(5) 授業開始までに時間がかかって困ったこと	394 7.4	1286 24.0	2621 49.0	1051 19.6	5352 100
(6) 授業を進めるのに苦労すると感じたこと	581 10.9	1932 36.1	2260 42.3	576 10.8	5349 100
(7) 授業中、児童が騒いだり立ち歩くなど困ったこと	246 4.6	887 16.6	2191 40.9	2030 37.9	5354 100
(8) 教師の努力や悩みを児童が理解してくれないと感じたこと	219 4.1	1219 22.81	2873 53.8	1032 19.3	5343 100

表より、「よくある」と「時々ある」を合計して6割を超えるのは(1)である。なお、(4)も58.6%とやや高くなっている。

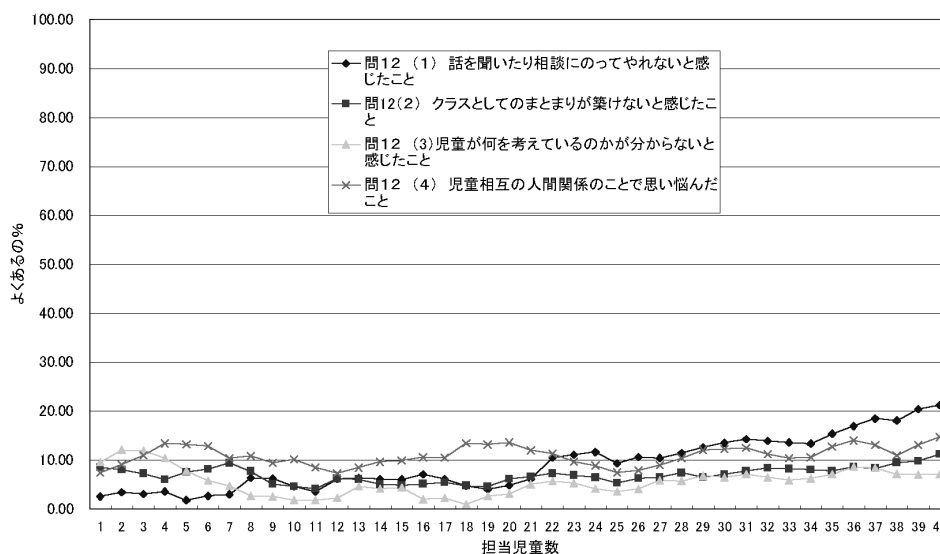
反面、(5)(7)(8)は「あまりない」と「全くない」の合計が68.6%~78.8%内と高率になっている。

なお、(2)(3)(6)は「よくある」と「時々ある」の合計と「あまりない」と「全くない」の合計が、それぞれ44.3%-55.6%、49.1%-50.9%、47%-53.1%とほぼ拮抗している。

< 移動平均法による分析 >

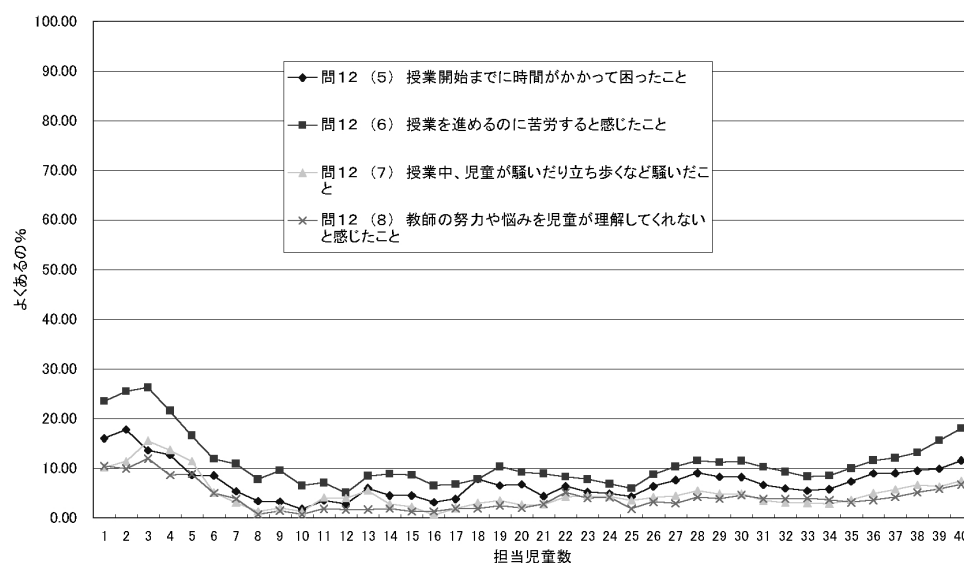
次に、「よくある」とする回答結果を基に移動平均法による分析を行った。その結果を示せば、<図6-2-1>及び<図6-2-2>の通りである。

図 6 - 2 - 1 学級運営や児童の生活指導 その 1（移動平均法）



＜図 6 - 2 - 1＞より、(1)(2)(3)(4) とともに、児童数 1 人から 40 人までの学級において「よくある」と感じる度合いが、それぞれ2%～21%内、5%～11%内、1%～12%内、7%～15%内の類似した状況にある。

図 6 - 2 - 2 学級運営や児童の生活指導 その 2（移動平均法）



また、＜図 6 - 2 - 2＞においても、(5)(6)(7)(8) とともに、児童数 1 人から 40 人までの学級において「よくある」と感じる度合いが、それぞれ2%～18%内、5%～25%内、0%～15%内、1%～12%内の類似した状況にある。

6 - 2 - 2 中学校教師の場合

＜全般的特質＞

中学校教員の回答結果を整理して示せば、次の＜表 6 - 2 - 2＞である。

表6-2-2 学級運営や生徒の生活指導の実態

授業の特質	よくある	時々ある	あまりない	全くない	合 計 度数 / %
(1) 話を聞いたり相談にのってやれないと感じたこと	1359 27.8	2623 53.7	805 16.5	95 2.0	4882 100
(2) クラスとしてのまとまりが築けないと感じたこと	950 19.5	2346 48.1	1408 28.9	172 3.5	4876 100
(3) 生徒が何を考えているか分からないと感じたこと	809 16.6	2617 53.6	1378 28.2	78 1.6	4882 100
(4) 生徒相互の人間関係のことで思い悩んだこと	880 18.1	2481 50.9	1393 28.6	117 2.4	4871 100
(5) クラスでの話し合いや活動の開始までに時間がかかって困ったこと	991 20.4	1870 38.4	1707 35.1	302 6.2	4870 100
(6) クラスでの話し合いや活動を進めるのに苦労すると感じたこと	968 19.9	2004 41.1	1665 34.2	235 4.8	4872 100
(7) クラスでの話し合いや活動の途中で生徒が騒いだり立ち歩くなど困ったこと	379 7.8	1107 22.7	1986 40.8	1398 28.7	4870 100
(8) 教師の努力や悩みを生徒が理解してくれないと感じたこと	495 10.2	1731 35.5	2133 43.8	512 10.5	4871 100

表より、「よくある」と「時々ある」を合計して6割を超えるのは(1)(2)(3)(4)(6)である。なお、(5)も58.8%と高くなっている。

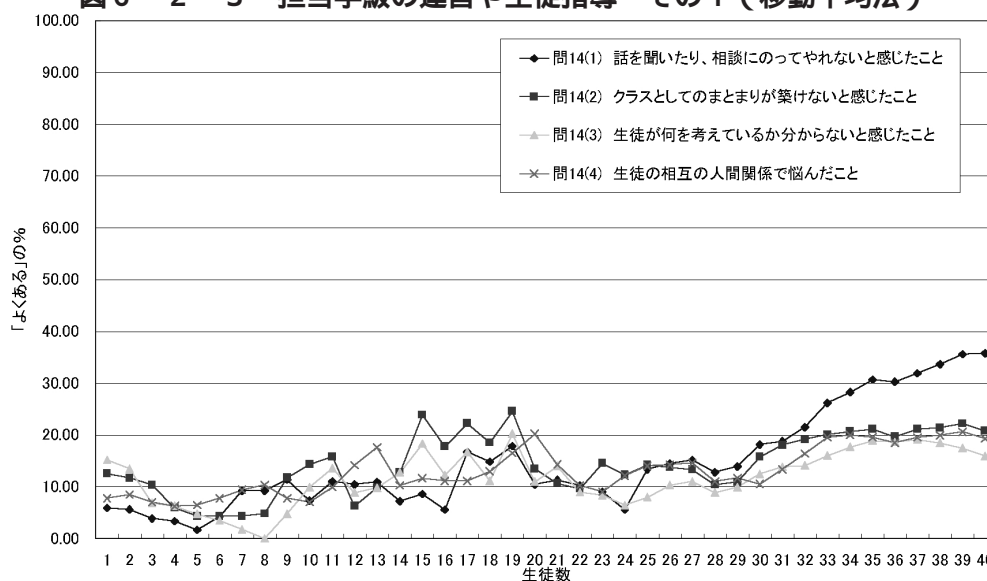
反面、(7)では「あまりない」と「全くない」を合計すると69.5%の高率にある。

残る(8)は、「よくある」と「時々ある」の合計と「あまりない」と「全くない」の合計が、それぞれ45.7%、54.3%と相拮抗している。

<移動平均法による分析>

次に、「よくある」とする回答結果を基に移動平均法による分析を行った。その結果を示せば、<図6-2-3>及び<図6-2-4>の通りである。

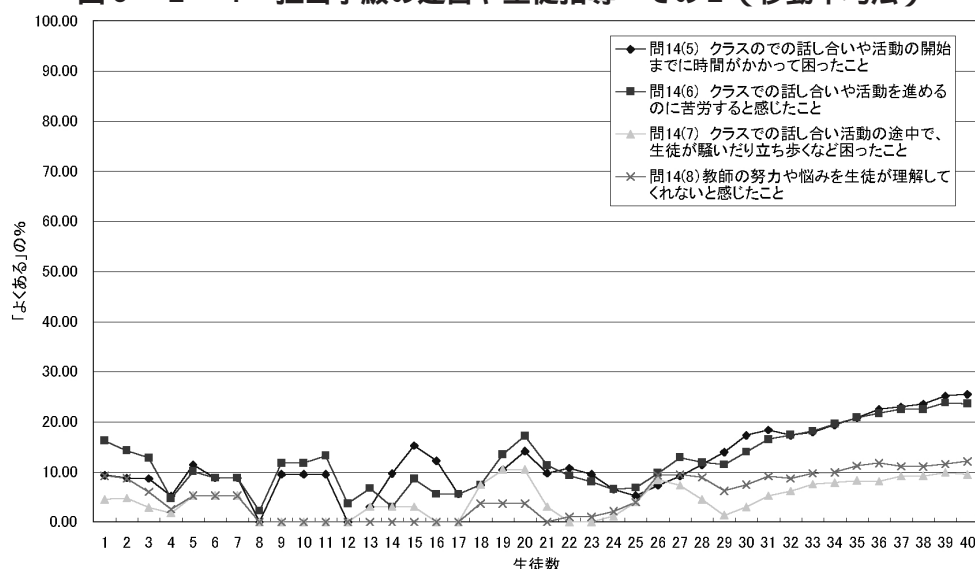
図6-2-3 担当学級の運営や生徒指導 その1(移動平均法)



<図6 - 2 - 3>には、前半の4項目に関する結果が示されているが、図より、(1)では、生徒数1人から30人までの学級においては、「よくある」度合いが25%～18%内で上昇や下降を繰り返しているが、31人以上ではその度合いが上昇傾向に転じている。

他の(2)(3)(4)では、いずれも、生徒数1人から40人までの学級において、概ね20%内の範囲で上昇や下降を繰り返している。

図6 - 2 - 4 担当学級の運営や生徒指導 その2（移動平均法）



<図6 - 2 - 4>によって後半の4項目に関する結果をみると、いずれも、生徒数1人から40人までの学級において類似の状況がみられる。すなわち、(5)は0%～25%の範囲内で、(6)は3%～24%の範囲内で、(7)は0%～11%の範囲内で、(8)は0%～13%の範囲内で、ともに上昇や下降を繰り返している。

6 - 3 考察

以上、小学校教員及び中学校教員の生徒指導の実態として、それぞれ「学級の児童・生徒の実態把握」及び「学級の運営や生活・生徒指導」の実態に関する調査結果を検討してきた。それらを総括すれば、まず、「学級の児童・生徒の実態把握」に関する5項目については、小・中学校教員ともに、全体的に、いずれの項目に関しても共通した児童・生徒の実態把握の状況にある。また、とりわけ、小学校教員では、(1)を除く他の4項目に関して、いずれも、児童数27人以上になると苦労する度合いが上昇する傾向がみられる。

他方、「学級の運営や生活・生徒指導」に関する8項目については、概して中学校教員の方がより悩みや問題を感じるケースが多い。しかし、それにもかかわらず、小・中学校教員は、どの規模の学級を担任しようと、ともに類似した指導の実態にある。

このようなところから、小学校及び中学校教員は、ともに、苦労しながらも生活・生徒指導上の諸問題に対して共通した類似の取り組みの実態にあるといえよう。児童・生徒の生活・生徒指導のためにははたしてどのくらいの学級規模(=生活集団)が適正であるかをめぐっては、今後の実験的な取り組みや研究を期待したい。